



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

新型コロナウイルス感染症影響下における小学校の
特別活動のカリキュラムの変容：
東京都千代田区の教育課程届, 学校だより,
教師インタビュー調査を用いた事例研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): Extracurricular Activities, Curriculum, Case Study, COVID-19 作成者: 林,尚示, 安井,一郎, 鈴木,樹, 眞壁,玲子, 元,笑予, 下島,泰子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173551

新型コロナウイルス感染症影響下における 小学校の特別活動のカリキュラムの変容

— 東京都千代田区の教育課程届, 学校だより, 教師インタビュー調査を用いた事例研究 —

林 尚示*¹・安井 一郎*²・鈴木 樹*³・眞壁 玲子*⁴・元 笑予*⁵・下島 泰子*⁶

学校教育学分野

(2021年9月13日受理)

1 はじめに

本研究の問いは, 新型コロナウイルス感染症影響下での小学校の特別活動について, どのような変容があったかである。新型コロナウイルス感染症影響下では, 授業時数や教育方法の面で, 小学校の特別活動は例年と異なる方法で実施されている。この際, 各学校において, どのような変容があったのかを考え, 研究を進めていく。

サブクエスションは2つある。それは (1) 新型コロナウイルス感染症影響下の特別活動において生徒エージェンシーを育成するためにどのような工夫がなされたのか, (2) 特別活動は新型コロナウイルス感染症の影響を全体的に受けるのではなく影響の大きい内容とそうではない内容があるのではないかと, というものである。

この研究の背景には, 先行研究で指摘されているように, 経済協力開発機構 (OECD) の提唱しているエージェンシーが特別活動で効果的に育成可能なのではないかという考えがある (Hayashi, Sugimori, Fuse, Yuan & Shimojima, 2020)。本研究におけるフレームワークとなる考え方には OECD のコンピテンシーやエージェンシーの概念を活用した。現在, OECD は PISA 調査等を通して 2030 年の教育モデルの検討を国際協調の下で推進している。Student Agency for 2030 (OECD, 2019) によると, 生徒エージェンシーとは「変革を起こすた

めに目標を設定し, 振り返りながら責任ある行動をとる能力」と定義されている。具体的には生徒エージェンシーは「生徒が社会に参画し, 人々, 事象, および状況をより良い方向へ進めようとする上で持つ責任感」, 共同エージェンシーは「生徒が, 共有された目標に向かって邁進できるように支援する, 保護者との, 教師との, コミュニティとの, そして生徒同士との, 双方向的な互いに支え合う関係」 (OECD, 2019, p.4) である。調査においては, これらのエージェンシーの概念を用いて, 検証可能なレベルで特別活動を取り扱うこととした。

他の先行研究としては, 感染症と特別活動に関連するものとして『道徳と特別活動』(2020)で特集が生まれ, いくつかの指導の工夫が提案されている。

例えば, 石原 (2020) はリーフレットを活用して新型コロナウイルス感染症影響下で特別活動の活性化を図り, 久保田 (2020) はソーシャルディスタンスを意識した特別活動の創意工夫を報告している。これらは個々の事例として価値がある。また, 新型コロナウイルス感染症影響下での特別活動の実践についての全国的な質問紙調査も行われている (日本特別活動学会, 2020)。一方で, 地方公共団体における学校の取り組みを全体として論じた研究はまだ十分ではない。特別活動における新型コロナウイルス感染症対策の研究としては, このような状況にあることをふまえて, 本研究では具体的な地方公共団体での事例をもとに今後の

* 1 東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

* 2 獨協大学 (340-0042 埼玉県草加市学園町1-1)

* 3 鎌倉女子大学 (247-8512 神奈川県鎌倉市大船6-1-3)

* 4 文京学院大学 (113-8668 東京都文京区向丘1-19-1)

* 5 玉川大学 (194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1)

* 6 東海大学 (259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1)

教育実践に有為な成果を示そうとした。

なお、日本特別活動学会研究推進委員会コロナ禍下の特別活動に関する学会員対象アンケートWGが2020年に実施した「新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題と今後に関する調査」では、次の指摘がある。新型コロナウイルス感染予防が最優先となる社会や学校教育の現状のなか、特別活動の意義や特質について改めて「非常に考えた」人が9割近くに上った。8割以上の人々が特別活動の実施に関して制約があると感じていた（日本特別活動学会, 2020, p.2）。これらのことを背景として、本研究では、制約の中でどのように特別活動を計画し実施したのか調査した。

2 方法

先に述べた研究背景や研究目的を通じて、具体的な地方公共団体での2020年度の取り組みを事例として、教育課程届、学校だより、教師インタビュー調査といった多面的な視点から新型コロナウイルス感染症影響下における特別活動の計画及び実践の特徴を明らかにすることにした。具体的には、変化のあった内容として、全校または学年で実施する学校行事とそれ以外の活動では、指導内容や留意点の変容の特徴が異なるのではないかと考えた。

今回の研究は標本抽出ではなく事例研究として、東京都千代田区の小学校を対象とした。なお、千代田区を対象としたのはICTの活用が進んでおり、調査実施時点で学習用情報端末が1人1台いきわたっていたためである。また、東京23区を中心に位置し、都市の空洞化を克服しつつ、「教育と文化のまち千代田区宣言」を出すなど、東京の顔にふさわしい教育環境を整えようとしているからである。いきいきとした生活の場、学ぶ場などを築き上げるために教育委員会が努力を続けている点などが選定理由である。（千代田区教育委員会事務局子ども部子ども総務課子ども総務係, 2016）

研究対象とするものは、各校の教育課程届、学校だより、教師インタビュー調査である。教育課程届は事前計画を把握するための材料であり、学校だよりはその時々のリアルタイムの状況把握のための材料であり、教師インタビューは一定期間後の振り返りの材料である。なお、教育課程届については、情報開示請求を活用して収集した。

（林 尚示）

3 研究の結果

3.1 教育課程届と学校だよりの分析

教育課程届について新型コロナウイルス感染症影響前の2019年度と新型コロナウイルス感染症影響下の2020年度の比較を行った(表1)。対象の5校において、新型コロナウイルス感染症影響下で休校となった4月と5月の活動内容の記載がないもの、実施不可となった活動に取り消し線を引いたもの、「見直し版」として配当時数の時数減を示したものに分類することができた。実施不可となった教育活動は遠足などの学校行事であったが、時数の削減または実施しなかった内容については学校により差があった。A小学校は時数削減した内容として「家庭学習で取り組んだ内容」としている。「プールの使い方」など教室での指導を取りやめたもの、「図書館の使い方」のように低学年では中止し、高学年では延期して行った活動がある。内容を精選し、家庭で学んだとみなし、2か月分の授業時数の欠如を補う工夫を教育課程届から読み取ることができた。

次に学校だよりから特別活動の変容を抽出した。結果として、学校行事、クラブ活動・委員会活動・集会活動について変容があった。学校行事の運動会について創意工夫が顕著であった。具体的には次の通りである。

学校行事は、区の教育委員会の指示により、宿泊を伴う4年生の岩井臨海学校、5年生の孺恋自然体験教室、小学校6年生の箱根移動教室や区連合行事が中止となった。ただし中止とした宿泊行事については、代替となる体験活動等を各校で検討し、実施した。

学校行事の中の運動会は、区の教育委員会より「運動会、体育祭、文化的行事については、例年通りの開催ではなく、三密（密集、密接、密閉）を避け、競技内容や保護者の参観方法等、工夫をし、新型コロナウイルス感染症対策を十分に講じたうえで実施する」との指示を受け、各校で実施した。具体的には、団体競技や全校競技をやめるなどして種目を減らし、時間の短縮を図った。演技ではフィジカルディスタンスをとれる演目を行っていた。組体操では、直接手をつなぐに鉢巻きで繋がったり、手袋を着用したりしていた。保護者の参観については、人数を制限し、LMSのTeamsの配信で実際に参観できない分を補っていた。

クラブ活動・委員会活動・集会活動については、緊急事態宣言中は中止となっていた。解除後は、集会活動は、全校児童が一堂に会さぬようにLMSのTeamsを活用し、バーチャルではあるが双方向の交流がとれる

表1 教育課程届 (2019年度版・2020年度版)

小学校名	学校目標 (生徒エージェンシーに関わるもの)	特色ある特別活動	実施不可となった活動 時数削減・未実施の内容	2019年度と2020年度との 相違 (見直し版)
A小学校	明るく元気な子 *進んではたらく子	縦割り班「わんぱくキッズ活動」、仲間との関わり「フレンドシップサポート」	孺恋自然体験教室 (5年生)	4~6月の活動内容を減らさず、各活動時間を短縮して6月に実施
B小学校	心も体もたくましい子 *進んで学ぶ子	縦割り班「フレンズ清掃」 異学年交流「ワッハハの日」	遠足 ボールの使い方 プールの意義と安全	実施不可となった活動に取り消し線
C小学校	明るく元気な子 *よく考え、つくりだす子	児童会活動「子どもまつり」 縦割り班「仲良し班活動」	図書館の使い方 (学年によって延期) 6月校外学習を2学期に延期	見直し版 (4~6月分の活動内容を6月から活動内容を減らして計画) 時数減 (35→28)
D小学校	*やりぬく子	国際理解「ユニセフ・赤十字募金」	孺恋自然体験教室 箱根自然体験教室	4月5月の活動を削除し、6月からは当初の計画
E小学校	*未来を築く□ □の子	地域の教育力を活かす 地域の一斉清掃に参加	全校遠足 展覧会を学習発表会に変更 学校図書館の活用	見直し版 (区内の学校は全て夏期休業日を短縮し、8月末から授業とした。これに伴い、E小学校は前期、後期の2学期制にした。)

(学校名を明示しないために、部分的に□□で匿名化した。*は生徒エージェンシーに関わる文言を意味している。)

形で集会を実施していた。クラブ活動・委員会活動については三密を避けてできる内容や方法を子どもたちに考えさせ、子どもたちのアイデアを生かした活動を行っていた。

A小学校の10月の学校だよりに、特別活動と関連する内容として保護者・地域へ向けて、「学校に通うこと、教室で勉強すること、友達と遊ぶこと、給食を食べること、掃除をすること・・・これまで、できて当たり前かと思っていたことが、できなかつたり制限されたりしている。今、自分の生活を振り返り、物事をポジティブに捉えて生活したり、新たな課題に対してより良い解決策を打ち出したりすることを大切にしていきたい。」という管理職の記述があった。特別活動の記述は表2のとおりである。

(眞壁 玲子, 下島 泰子)

3. 2 インタビュー調査の分析

2020年9月から11月まで東京都千代田区内の5つの小学校の教員インタビュー (5名) を行った。5校のうちA小学校は6年生担任、B小学校は2年生担任かつ特別活動主任、C小学校は5年生担任、D小学校は1年生担任かつ特別活動主任、E小学校は6年生担任かつ特別活動主任である。インタビューの質問内容について、「1 新型コロナウイルス対策で、オンラインなどでどのようなことを行っていますか。」「2, 3か月休校があった中で行った学級経営 (児童生徒の生活指導, カ

リキュラム経営) の工夫をお知らせください。」「3 新学習指導要領では特別活動は人間関係形成, 社会参画, 自己実現の視点から資質・能力を育成しようとしています。対応はどうなっていますか。」「4 PISA2021もまもなく始まりますが、OECDのエージェンシー (児童生徒の主体性) などについていかがお考えですか。」である。分析について、まず5校の全体の工夫をまとめて (表3)、全5校はすべてオンライン・Teamsを使用していることがわかった。また、各活動について、分析方法として木下 (2003) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach: 以下M-GTA) を採用した (表4)。

M-GTAの分析にあたってはインタビューデータから「カテゴリー」を作成し、分析の基礎的な単位とした。まず、1人分のインタビューデータを検討し、各活動を分析しカテゴリーを生成した。例えば、「運動会のスローガンを考えたりとかそういったところでも代表委員会の活動をしてくれているところですね。運動会はなんとか行うことができましたので。運動会は密にならないことです。(B小)」という部分に着目し、この部分を「密を避ける工夫」という名称で下位カテゴリー化し、「運動会」とカテゴリー名をつけた。これを1人分のデータ全体において分析し、複数のカテゴリーを生成した。なお、分析ワークシートはカテゴリー1つに1枚ずつ作成した。1人分のデータの分析が終

表2 特別活動に関する記述

小学校名	特別活動	生徒エージェンシーに関わるもの	新型コロナウイルス感染症への配慮	2019年度と2020年度との相違
A小学校	運動会	友達とのかかわりの中で大きく成長することをめざす。体験的な活動を通して進んではたらくことの喜びを味わい、集団への所属感や連帯意識を深める。	フィジカルディスタンスを保つ。開閉会式は6年児童のみ校庭で参加。他学年は各学級でTeamsによる参加。保護者の観覧は入れ替え制Teamsにて配信。	開催時間の短縮。 午前中で開催。
B小学校	運動会	新たな生活環境での練習に取り組み、成果を出し切る。	コロナ禍であっても「こうすればできる」と前向きに検討を重ねた。1, 2, 6年は校庭, 3, 4, 5年はTeamsで開会式に参加。表現と徒競走を行い、団体競技は行わない。	内容と観覧の変更。 リハーサルなし。 時間の短縮。
C小学校	運動会	6年生が開会の言葉から閉会の言葉までのプログラムを作り、全員が応援や挨拶等の係となり取り組んだ。逆境に打ち勝ち躍動する6年生に大きな拍手。	PTAと千代田区教育委員会のご協力でDVDを全家庭に配布。	
D小学校	運動会	子どもたちの練習への意気込みを見ていて、例年と違う形態の実施でありながら、どの学年からも心から運動会を楽しみにしていることが伝わってきた。	児童同士の密集・接触の無いプログラムの見直し、「短距離走」と「表現」のみを実施。Teamsを活用。開会式・閉会式だけでなく、各学年の演目も配信する。	登校時刻をずらし、学年ごとに演目を終えたら下校。午前中開催。
E小学校	運動会	子どもたちは「希望もち 全力協力 新運動会」のスローガンのもと、一回一回の練習を大切に、協力し合って取り組む。諦めることなく運動会まで全力で駆け抜ける子どもたちはとても輝いて見えた。	密にならないよう隊形移動を極力少なくしつつも見栄えも考えながら、各学年が工夫を凝らして行った。運動会の様子を動画(Smart Skill Campus)で配信。	開会式や閉会式は1~4年はTeamsを活用して教室で参加し、競技も表現と徒競走のみ。
A小学校	集会活動	自分たちで考えた内容で、学校生活を楽しいものにしたと、工夫。話合いの中で、コロナ感染症の対応を考えた発言が出るなど、現状の中で可能なことを子供たちなりに考えている。	Teamsを活用して、新しい形のゲーム集会をいろいろと工夫。各クラスの考えもメッセージを書き込むことで、取り入れることもできている。	緊急事態宣言中は、児童集会等はオンラインでの配信。話合い活動は、教育的効果が高い場合であっても短時間の実施。マスクとフェイスシールド同時使用。
A小学校	委員会活動	めあての達成を目指し、与えられた仕事に一人一人が責任をもって日々活動している。課題意識をもって活動し楽しく豊かな学校生活を支える。毎回の振り返りを大切にしている。	広報委員会は、委員会発表集会では、SDGsについての動画を作成しTeamsで発表。	

表3 全体の工夫—オンライン・Teamsの使用

C小学校	今行っているのは学年集会とかを、うちの学校はオープンなので、廊下のほうで教員が立ってマイクを使って行ったりとか。オンラインもTeamsを各教室でつなぎまして。なので、学年集会とかを一つの場所に集まらずに、各クラスでオンラインで行ったりとかをしています。休校期間中は朝の会だったり、授業だったりというのは配信はしたりとかしましたね。Teamsを使って。
E小学校	オンラインは休校中はTeamsを使ってオンライン学習を、休校時の後半と分散登校期間に行っていました。それ以外に課題を配布したりということもやりました。学校が始まってからはTeamsを使って運動会ですとか学習発表会は学年ごとに保護者の方に披露したので教室でも見られるように、あと保護者の方も厳選というか人数を限ったのでおうちでも見られるようにということで運動会、学習発表会を配信しました。今は全校朝会や児童集会を朝Teamsで配信をして行っています。それからSmart Skill Campusというので行事の、運動会や学習発表会の動画配信ですとか学校生活の様子を配信しております。

表4 工夫の顕著な活動

カテゴリー	下位カテゴリー	抽出した文脈
運動会	密を避ける工夫	運動会のスローガンを考えたりとかそういうところでも代表委員会の活動をしていてるところですね。運動会はなんとか行うことができましたので。運動会は密にならないことです。(B小)
	オンラインの工夫	学校が始まってからはTeamsを使って運動会ですとか学習発表会は学年ごとに保護者の方に披露したので教室でも見られるように、あと保護者の方も厳選というか人数を限ったのでおうちでも見られるようにということで運動会、学習発表会を配信しました。今は全校朝会や児童集会を朝Teamsで配信をして行っています。それからSmart Skill Campusというので行事の、運動会や学習発表会の動画配信ですとか学校生活の様子を配信しております。(E小)
	交替制	運動会はやりました。しましたが、交替、学年ごとの交替制です。保護者も完全入れ替え制で。(D小)
	課題になる	今運動会の練習が始まってるんですけども、運動会に向けてみんなはどういう思いでやっていきたいですかとかを聞いたときに、それぞれでカメラがつながってるので手を挙げてもらって、じゃあそっちのクラスの誰々さんとかあてて、そこで話してもらって、各教室で学年集会を離れた場所で行うことができます。(C小)
委員会活動	Teamsの使用	委員会活動だったりっていうのは、朝会の時間とかに全校にTeamsをつないで各教室で、体育館とかに集まることなく、給食委員からのお話ですとかを使ったりとかもしてますし。(C小)
	活動の再開	4月7日の段階で特活委員会でも出させていただいた提案がこちらになるんです。委員会活動は今は復活しました。何とか今行っています。(B小) 特別活動、クラブだとか委員会だとかっていうのを本当にずっとできないまま今年もきて、ようやく2学期から委員会、クラブを始めて。7月でしたっけ、委員会のほうが先に始まりましたね。(E小)
係活動	活動の再開	係活動は2学期から始めてます。1年生。(C小) 子どもとは係活動とかでも、コロナ禍でもできるような活動っていうところで、今までは新聞係っていうのが、私持ち上がりなので5年生のときあったりとかして。よく1週間に1回、1枚の白画用紙に新聞としてクラスのニュース書くみたいなのがあったんですけど、子どもなりに私から言わなくてもニュースだったら、動画だったら配信できる中休み、昼休みとかも使いながらタブレットで動画を撮ってやってくれたりします。(D小)
	課題になる	私も入る前は係活動と当番活動の違いとかもわからずやってたものもいろいろ教えていただいて。われわれはゆとりもあったのでそれを休校期間中は若い先生たちOJTでいろいろ特別活動ってこういう全体像とか、いろいろお話もしたりできたので。やっぱり広めていくっていう部分はこれから課題でもあるし、そういう中で機会を与えていただいているところでもあります。(E小)

わり次第、次の対象者の分析に移行した。新たにカテゴリーを生成する場合、既成のカテゴリーとの相違が検討され、さらに分析済みのデータに具体例が出現していないか再び確認した上で、カテゴリー名と定義を検討した。その結果、相違が認められない場合は既成のカテゴリーにそのバリエーションとして包摂した。よって、5校のインタビュー内容から「運動会」、「委員会活動」、「係活動」という3つのカテゴリー名が抽出された。

(元 笑予, 鈴木 樹)

4 結論

本研究の問いは、新型コロナウイルス感染症影響下での小学校の特別活動について、どのような変容があったかということをも明らかにすることであった。また、サブクエスションは(1)新型コロナウイルス感染症影響下の特別活動において生徒エージェンシーを育成するためにどのような工夫がなされたのか、(2)特別活動は新型コロナウイルス感染症の影響を全体的に受けるのではなく影響の大きい内容とそうではない内容があるのではないか、であった。教育課程届、学校日より、教師インタビューの分析と検討の結果、以下の三点が明らかになった。

第一に、教育課程届の分析からは、特別活動につい

では、2019年度と同等の内容を保障しようと考えている学校がほとんどであった。しかし、授業時数の減少・修正が行われている学校があり、集団宿泊の行事の中止や日帰り行事への変更が行われた。また、夏期休業日を短縮して授業時数を確保し、3学期制を2学期制に変更し、通知表を9月に出す等の対応をしていた。

第二に、学校だよりの分析や教師インタビューの結果から、運動会や委員会活動、係活動は、制約された条件の中で、当初のねらいをなんとか達成しようとする願いをもって、競技種目や実施方法の変更、LMS(Teams)の活用等、教師も子どもたちも一緒になって三密を避けるための種々の工夫を考えていた。教師も子どもたちも集団活動を意欲的に考えたり、前向きに話し合ったりして活動していたことが明らかになった。

第三に、LMS (Teams) を活用することによって、新型コロナウイルス感染症対策に資するだけでなく、時間と空間に制約されない活動が展開できる、新たな活動内容や発表方法を工夫できる等、特別活動の新たな可能性が示された。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症対策における様々な物理的制約の中にあっても、現場の教師たちは通常の活動で達成しようとしていた生徒エージェンシーを育成するために、種々の工夫を凝らして、実践に向き合っていた。そのことが、教師の教育実践に対する主体性と創造性の育成につながっていることが確認できた。

なお、残された課題としては、千代田区以外の区との比較による千代田区の変容の一般性の検討、従来の対面型の実践とLMSを活用した実践とで生徒エージェンシーの育成にどのような違いが生じているのかということについての検証を行うことである。

(安井 一郎, 林 尚示)

謝辞

本研究はJSPS科研費 18K02563の助成を受けたものである。ご協力いただいた千代田区教育委員会及び千代田区立小学校のみなさまに心から感謝申し上げます。

引用文献

- 千代田区教育委員会事務局子ども部子ども総務課子ども総務係 (2016) . 教育と文化のまち千代田区宣言. <https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kosodate/kyoikuinkai/sengen.html> (Retrieved on January 19, 2021)
- 石原良介 (2020) . 学校再開に向けた活動事例リーフレット : 実践事例紹介 今こそ特別活動の充実を (特集 休業解除以降の道徳・特別活動の展望 : 新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた工夫) 道徳と特別活動 文溪堂, 37(5), 22-25.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 - 質的研究への誘い. 弘文堂
- 久保田泉 (2020) . ポストコロナにおける特別活動指導の工夫 (特集 休業解除以降の道徳・特別活動の展望 : 新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた工夫) 道徳と特別活動 文溪堂, 37(5), 18-21.
- Masami HAYASHI, Shinkichi SUGIMORI, Azusa FUSE, Xiaoyu YUAN, Yasuko SHIMOZIA (2020). Agency Development and Evaluation Scenes of the 'Unit of Inquiry Learning,' an Integrated Subject of 'Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study' and 'Extracurricular Activities', 関係性の教育学, 関係性の教育学会, 19, 1-12.
- 日本特別活動学会 (2020) . 新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題と今後に関する調査第一次結果報告. <https://jascatokkatsu.jimdo.com/app/download/15848609622/%E7%AC%AC1%E5%9B%9E%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8201011.pdf?t=1606352873> (Retrieved on February 20, 2021)
- OECD (2019). OECD Student Agency for 2030. 仮訳 2030年に向けた生徒エージェンシー. https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf(Retrieved on February 9, 2021)

新型コロナウイルス感染症影響下における 小学校の特別活動のカリキュラムの変容

— 東京都千代田区の教育課程届, 学校だより, 教師インタビュー調査を用いた事例研究 —

Transformation of Curriculum in the Extracurricular Activities in Elementary Schools during COVID-19:

Analysis on Curriculum Reports, School Newsletters, and Teacher Interview Data
in Chiyoda-city Tokyo

林 尚示・安井 一郎・鈴木 樹・眞壁 玲子・元 笑予・下島 泰子

HAYASHI Masami*¹, YASUI Ichiro*², SUZUKI Tatsuki*³, MAKABE Reiko*⁴,
YUAN Xiaoyu*⁵ and SHIMOJIMA Yasuko*⁶

学校教育学分野

Abstract

This study was conducted to clarify the changes in the curriculum of extracurricular activities in elementary schools under the influence of the COVID-19 using curriculum reports, school newsletters, and teacher interview data in Chiyoda-ward, Tokyo.

The purpose of this study is to reveal what kind of changes have occurred in the curriculum of extracurricular activities in elementary schools under the influence of the COVID-19. Under the influence of the COVID-19, extracurricular activities in elementary schools are conducted in a different way from usual years in terms of the number of class hours and teaching methods. In this study, we considered what kind of changes occurred in each school.

We selected Chiyoda-ward in Tokyo as a local municipality and explored the characteristics of the planning and practice of extracurricular activities under the influence of the COVID-19 from multiple perspectives, such as curriculum reports, school newsletters, and teacher interview data. Specifically, the research was conducted based on the idea that the characteristics of changes in the content of instruction and points of concern might differ between school events and other activities conducted by the entire school or grade level.

The results of the study are as follows. First, from the analysis of the curriculum reports, most of the schools would guarantee the same content for extracurricular activities as in the 2019 school year. However, some schools have reduced or modified the number of hours, cancelled overnight school trips, or changed to day events. Second, from the analysis of the school newsletters and the results of the teacher interviews, it became clear that schools tried to achieve the original

* 1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)

* 2 Dokkyo University (1-1 Gakuen-cho, Soka-shi, Saitama, 340-0042, Japan)

* 3 Kamakura Women's University (6-1-3 Ofuna, Kamakura-shi, Kanagawa, 247-8512, Japan)

* 4 Bunkyo Gakuin University (1-19-1 Mukogaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8668, Japan)

* 5 Tamagawa University (6-1-1 Tamagawagakuen, Machida-shi, Tokyo, 194-8610, Japan)

* 6 Tokai University (4-1-1, Kitakaname, Hiratsuka-shi, Kanagawa, 259-1292, Japan)

aims under the constrained conditions. For example, the field day, committee activities, and class duties were carried out with various innovations such as changing the events and methods of implementation, and using LMS (Microsoft Teams). Third, the use of LMS (Microsoft Teams) not only contributes to countermeasures against the COVID-19, but also shows new possibilities for extracurricular activities, such as the development of activities that are not restricted by time and space, and the devising of new activity contents and presentation methods.

Keywords: Extracurricular Activities, Curriculum, Case Study, COVID-19

Department of School Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要 旨

本研究は、東京都千代田区の教育課程届、学校だより、教師インタビュー調査を用いて、新型コロナウイルス感染症影響下における小学校の特別活動のカリキュラムの変容を明らかにしたものである。

本研究の問いは、新型コロナウイルス感染症影響下での小学校の特別活動について、どのような変容があったかである。新型コロナウイルス感染症影響下では、授業時数や教育方法の面で、小学校の特別活動は例年と異なる方法で実施されている。この際、各学校において、どのような変容があったのかを考え、研究を進めた。

研究方法は、地方公共団体として東京都の千代田区を選び、2020年度の取り組みを事例として、教育課程届、学校だより、教師インタビュー調査といった多面的な視点から新型コロナウイルス感染症影響下における特別活動の計画及び実践の特徴を探究した。具体的には、変化のあった内容としては、全校または学年で実施する学校行事とそれ以外の活動では、指導内容や留意点の変容の特徴が異なるのではないかと考えて研究を進めた。

研究の結果は、次の3点である。第一に、教育課程届の分析からは、特別活動については、2019年度と同等の内容を保障しようと考えている学校がほとんどであった。しかし、授業時数の減少・修正が行われている学校があり、集団宿泊的行事の中止や日帰り行事への変更が行われた。第二に、学校だよりの分析や教師インタビューの結果から、運動会や委員会活動、係活動は、制約された条件の中で、当初のねらいをなんとか達成しようとする願いをもって、競技種目や実施方法の変更、LMS(Teams)の活用等種々の工夫を行って実施されていることが明らかになった。第三に、LMS(Teams)を活用することによって、新型コロナウイルス感染症対策に資するだけでなく、時間と空間に制約されない活動が展開できる、新たな活動内容や発表方法を工夫できる等、特別活動の新たな可能性が示された。

キーワード：特別活動、カリキュラム、事例研究、新型コロナウイルス